

「源氏物語」と和歌について

1

さきごろ物故された益田勝実氏の、いくつもの優れた業績のなかに、すでに「古典的」といっていいそのの一つに、「歌語り」というタームの提唱が数えられよう。しかるに、向後の学界一般のそれについての理解は、かならずしも当を得たものとは言えない。ここに、おそらく学界一般の平均的理解の標準ともいべき、諸事典類におけるその記載をみるに、それは、単なる和歌史における風俗的現象として、あるいは「大和物語」などの関わりが「短歌説話」という、むしろ説話研究の領域におしやられて、ふれられるにとどまり、参考文献としてもせいぜい高橋正治氏の名

野村精一

をみることはあっても、ついぞ益田氏のそれを引くことがない。^(注1) いわんや物語研究の側においておや、の印象である。これは、その不当をなじることよりも、その不学を笑うべきことに属するのであろうか。いま、その思いをいささか押さえて、いまひとたび、その原点にたちもどるところから、叙述をはじめてみたい。これ以上、氏の研究史的位置付けをおろそかにはできない、という、いささか苛立ちめいた心情を隠すことができないのである。

2

さてこの詳細は、^(注2)氏じしんのそれについて見るべく、あえて重複をいとわず用例を引くことによって、ここでの

叙述に資したい。ことは、なにをおいても「源氏物語」のばあいであろう。

……よろつの御ものかたり文の道のおほ^(注3)

つかなくおほさる、事ともなとはせ給て

又すきくしきうたかたりなともかたみにき

こえかはさせ給ついでに……

〔さか木〕 三七ウ〜三八オ)

……ことなるゆへなきこと

はをもこゑのとやかにおししつめていひいた

したるはうちきくみ、ことにおほえおかし

からぬうたかたりをするもこゑつかひつきつき

しくてのこりおもはせもとすゑおしみたるさま

にてうちすむしたるはふかきすち思ひえぬ

ほとのうちき、にはおかしかなりとみ、もと

まるかし……

〔とこなつ〕 二三ウ〜二四オ)

……とし比の御ありさまなど

かたりてなにのおりたにとの給し花紅葉

の色を見てもはかなくよみ給けるうた

かたりなどをつきなからすうちわな、きた

れとこめかしくことすくな、るものから

おかしかりける……

〔やとり木〕 八一ウ〜八二オ)

みられるように、大島本など流布の源氏諸本のばあい、この3例につきるのであるが、いわゆる別本の、東山御文庫蔵「御所本」^(注4)などによれば、「さか木」の「うたかたり」は「むかしものかたり」とあって、さらに1例をけずることとなる。卒然として益田氏につけば、このことはが源氏や枕に類出するかのごとき錯覚をあたえるのは、益田氏が、単に「うたかたり」の一語のこだわることなく、たとえば「歌」を「語る」という現象じたいに着目されたがゆえであろう。ちなみに、この文例の多くみられる「枕草子」のばあいについては、別に記すところがある。^(注5)以下、右について、若干の補記をこころみる。

〔さか木〕のそれは、源氏と朱雀院との対話の様相を描いたもの、源氏をめぐる政治情勢の逼迫のさなか、この兄弟のゆとりある話しのさまが、あえて挿入されている印象であろう。「よろつの御ものかたり」のなかのひとつであって、「文の道」などは対照的な「すきくし」い話柄であったのであろう。ここには、この「うたかたり」な

るものへの作者なりの評価の姿勢が伺えるところである。

「とこなつ」の「うたかたり」は、かの近江の君のそれである。されば、ここでもおもしろくもない「うたかたりの打ち聞きならごまかせるのだが……、というようなどころである。ちなみに「打聞」の用例も、この長編中唯一のものである。^(注6)しかも、その数行前に、「うちきくみ、ことに……」とあって、たんにその連用形をもちいたにすぎないのかもしれないのである。

「やどり木」のそれは、宇治の阿闍梨のもとをたずねた薫に、弁尼の、「こひめ君」すなわちなくなつた宇治大君を回想したことを述べたところである。「よみ給けるうたかたり」というかかりかたに不審がないでもないが、弁尼の語り口についての、一つの表現のし方をあらわしたものとよめないではない。^(注7)

さて、その「源氏物語」をのぞけば、「紫式部集」にみえる1例が残るのみである。

わつらふ事ある比なりけるかひぬま^(注8)

の池といふ所なんあると人のあやしき

哥かたりをするをき、て心みによまむ

といふ

世にすむになとかひぬまのいけらしと

おもひそしつむそこはしらねと（一八ウ―一九オ）

ここでは、はっきり「あやしき哥かたり」とあって、このことばに、ないし、その実態にかかわって、この人の、「歌語り」に対する思いが明らかな用例といえるであろう。ここに、この人の「日記」における歌詠み批判の文言を重ね合わせるならば、この人の、当代の歌壇史的状况にたいする、かなり忌憚のない思いが読みとられてくるのではあるまいか。節を改める。

3

では、この作の中で、具体的に「歌語り」はいかなるかたちで展開されているか。たとえば、ごくわかりやすい例として、雨夜の品定めにおける頭中将ら三人の体験談を連想することもあろうが、むしろここでは、それにひき続くところから、引くこととする。

式部卿の宮の姫君にあさかほたてまつり

給し哥などをすこしほをゆかめてかたる

もきこゆくつろきかましくうたすしかち

にもあるかななをみおとりはしなんかしと

おほす……

(「は、き木」四二ウ)

源氏が、雨夜の品定め論議に触発されての冒険行の第一話、中川の紀伊守邸でのそれである。じつは、この部分、古来問題点おおく、かならずしも一義的な理解を期し得ないが、ともあれ、本論の論旨に関わる限りでふれば、これは、まさに典型的な「歌語り」の表現であろう。じつは当面の歌の語り口の描写に「ほをゆかめて」とあって、河海以来の「方曲」を始点とする当今の説にしたがえば、此の種「歌語り」の実体は、概ねかような歪曲ともいわぬまでも、おおくの「歌語り」の具体的な様相は、「歌」そのものの「文学的」な質にかかわるものではなかったようである。直後の源氏の感想「くつろぎがましく歌誦しがち」で、この分ではその女主人＝空蟬も「見劣り」がするのだろうか。つまりこの「歌語り」じたいが、物語の進行上、ある種の予見を読者に与えこそすれ、「うた」そのものももちろん、その「うたかたり」の内容実質への積極的・肯定的な評価をもたらすものではないことは、ほとんど明らかである。

ところで、この「歌語り」との対応について、古来かま

びすしい関わりの指摘がされているところをひく。権巻である。

……かれたる花ともの中にあさ

かほのこれかれにはひまつはれてあるかな
きかにさきてにほひもことにかはれる」

を、らせ給てたてまつれ給ふけさや

かなりし御もてなしに人わろき心ち

しはへりてうしろてもいと、いか、御

らうしけむとねたくされと

みしおりの露わすられぬあさかほの

はなのさかりはすきやしぬらんとしころ

のつもりもあはれとはかりはざりともし

おはししるらむやとなむかつはなと

きこえ給へりおとなひたる御ふみの

心はへにおほつかなからむもみしらぬやう」

にやとおほし人／＼も御す、りとりまかなひ

てきこゆれは

あきはて、きりのまかきにむすほ、れ

あるかなきかにうつるあさかほにつかはし

き御よそへにつけてもつゆけくと

のみあるはなにのおかしきふしもなき

をいかなるにかをきかたく御らむすめ

りあをにひのかみのなよひかなるすみ

つきはしもおかしくみゆめり人の

御ほとかきさまなどにつくろはれつ、そ

のおりはつみなきこと、もつきくしく

まねひなすにはほ、ゆかむ事もあめれ

はこそさかしらにかきまきはしつ、おほつ

かなきこと、もおほかりけり……

〔あさかほ〕七ウく九オ)

いささか長々しい引きざまではあろうが、それには理由がある。とは、その成立論のないし構想論的なつながりの有無にかかわらず、源氏と権とのかかわり、とくにその歌のやりとりについての「歌語り」としての具体的な例証には、耐えうるものと信じたからである。ことにその末尾「人の御ほと……」以下のごとき、草子地にもちかいかきざまでのコメントも付され、なかんずく右にもふれた「ほ、ゆかむ事」という物言いのあることも見逃しがたい。それらについては、ここでは、問題の所在を指摘するにとどめておきたい。ここでの関心は、この文脈において、「そのおりは……まねひなす」とあるように、話し言葉すなわち「語り」のできごとを、「さかしらにかきまきは

しつ、」とあるように書き言葉の次元への転化が、いささかの不自然の感を与えることなくしめされているのに注意したい。とはすなわち、「歌語り」の、物語言語への吸収ないし転換がさりげなく表出されているのであって、さらに言えば、かような構造は、この物語のなかでは、いたるところに見いだされるのである。逆に言えば、この物語におさめられた七九五首の「和歌」なるものの作品内での存在状態は、この「歌語り」の叙述のなかにある、といつてよいと思われる。言い換えれば、「源氏物語」のなかの「和歌」のありようは、すべて「歌語り」そのものであった、といいたいのである。

4

ここにいたって、はや予定の容量に及んだかに、みえる。いま、ことを節して述べざるを得ない。余した所は、次の二点に絞っておきたい。

すなわち、その一は、この「歌語り」ということばの用例は、むしろ当時きわめて稀少であり、その二は、その用い手が、ほぼ紫じしんに限られてくるらしい、ということである。おそらくそれは、実態としての「歌語り」や、物語作品に描かれたその量の量に比例しないものようである。

そのことじたい、なにを意味するか。

本来、「うた」は「よむ」ものであって、「かたる」ものではない。もちろん、独りで詠むこともあるが、おおくは贈られ、またそれに答えたものであった。会合の席で唱和することもあったろう。それらは、やがて、ひとの口へのぼり、あるいは集められて、勅撰の栄をえて、書物のかたちで、世に伝えられることとなる。「勅撰集」である。されば、「うたよみ」たちは、それを目指して、おのが「うた」の「集」を、みずから、あるいははしかるべき人の手によって、いわゆる「私家集」が編まれてきた。こんな初歩にひとしいことを、いかにもわざとらしく述べたのは、以下に記すところとの対比を試みたかったがゆえである。すなわち、「かたられたうた」のことへの、しかるべき認識のもんだいであった。

こちらは、いかにして伝えられたのか。しばしば、人々は、ここに「大和物語」という書物の名をあげる。しかし、なぜか、「源氏物語」の作者は、この書物については、触れることがない。それは、設定された年代に関わるのかもしれないが、この点では、この種の事に対して好意的だったかに見える「枕草子」の作者についても同じことなのである。しかし、この「かたられたうた」たちは、いわゆる「物語」の世界では、ことばとして生き延びていた。業平

はもちろんのことだが、竹取の翁にも、宇津保の俊陰にも、それぞれに関わる限りで、この「かたられたうた」が取り込まれていた。そして、光る源氏の「ものがたり」においても、同じことであった。ただ、この作者だけが、これに「歌語り」という名辞を与えたのであった。ただ、そのことは、ひさしく人々から忘れ去られていた。ようやく益田氏の慧眼によって、このほど、ようやく、思い起こされたにすぎまい。しかも、この「歌語り」の命名者は、それに対して、きわめて冷淡であった。彼女はその長編のなかで多様かつ多彩にそれを用いてきたにもかかわらず、そのことじしんについても、必ずしも評価していない趣きなのである。物語世界をひとつの歴史的事実としてえがいてきたこの作者にとつて、「うた」を、でなく、「歌語り」を、そのようなものの中のひとつとして取りこんだにすぎなかった。されば、とりあえずの「藤裏葉」のめでたき決着のあとに書き出した「若菜」巻においては、当初この「かたられたうた」たちは、排された。しかし、紫の死にさらされたかれ光源氏の、その思いを「語る」とき、それは「かたられたうた」が採られざるをえなかった。「幻」巻のそれである。この解きえぬ矛盾に対して、この作者は再度ころみる。「手習」の浮舟である。が、しかし、次なる「夢浮橋」には、薫の「うた」が、ただ一首、ほとんど放り出

されたにすぎない。この巻は、はや「歌語り」の方式さえ取り落として、物語のなかでは、もはや「うた」は、あるべきところをもちえない、というところに至った。が、もちろん、こうした葛藤は、後代をふくめて、その読者たちにとつて無縁のことであった。されば、そのキーワードたる「歌語り」ということばは、そのような意味で、だれも使う必要がなかったのである。

さて、右は、本来の命題、「源氏物語」と和歌、にたいしての答えとはなっていない。が、すくなくとも、それへの一階段を踏んだかにはみえる。当然の事ながら、稿は続けられるであろう。

注1 たとえば、岩波書店『日本古典文学大辞典』、明治書院『和歌大辞典』などの該当項目を瞥見しただけでも、しられよう。ただし、この因由を子細にたどれば、同じじしんの発想じたいにおいて、説話文学研究上のそれと見なさるべき発言があったことも事実であろう。氏の主著のひとつ『説話文学と絵巻』の「歌物語の方法」を参照されたい。なお、本書は、当時の日文協京都支部長南波浩氏らの企画にかかる「古典とその時代」シリーズの一つであった。研究史における「流行」ということの意味を、改めて痛感せざるをえない。

2 益田氏「『上代文学史稿』案」（『日本文学史研究』4（7）、「歌語りの世界」（『季刊国文』四号、ちくま学芸文庫『益田勝実の仕事』に収む）、『説話文学と絵巻』（三一書房、同前）、「物語文学と歌がたり」（『体系物語文学史 第一巻』有精堂）など。

3 いまここでは、便宜大島本によった。該本の信頼性については、なお疑いの目をもって接する向きもあるが、さりとて、かわるべきものをだれが提示したことか。ここは、必ずしも本文批判を旨とした叙述ではないので、用いた。傍書、書入等は省いたが、最小限の校訂はほどこした。

4 池田利夫氏のいわゆる「各筆源氏」。チームというものの変更は十分熟慮されてしかるべきものであろう。ここでは昭和以降半世紀にわたって通用してきた名称を用いる。

5 伝能因本および三卷本系諸本には、この語はみえず、のち説話関係者によつて、堺本にあると報告されたが、これはもと前田家本にあったもの、よつて、ここでは前田家本によつて引しておく。

……このころ世の中にきこえける事ともあはれなるもおかしきもまたうたかたなりなともさま／＼のとかかにしかはす……

6

ちなみに、右は小学館、古典全集一七九段「雪のいと高くはあらで」に照応するところではあるが、右の一文じたいが、それには欠けている。三巻本も同じ。このことは、通説に従えば、「歌語り」が、清少納言の語彙に属するか否かをを、疑わせるものとなるのではあるまいか。但し『大成 索引篇』では、もう1例を掲げる。但しそれは、二三ウしろから3行「うちきく」の「く」にミセケチして「き」（朱）とするものを、本文に採用しているからである。但同書『校異篇』による限り、別本の一部をのぞいて、「うちきき」とするものはみあたらない。新大系を除く諸注ごとごとく、これを用いないゆえんである。

7

やや相似たケースが、多く説話研究者によつてひかれること多い「うたものがたり」のばあいにあるので、ここで触れておく。浅野本「相模集」のばあいである。「私家集大成」番号一八五歌を引く。

つのに、すむこやの入道哥

ものかたりなどおほかたにいふ

人なりけりかとのまへをわた

るとていそく事ありてえま

いらすなにごとかといひたれば

なには人いそかぬたひのみぢならは

こやとはかりもいひはしてまし

なぜか浅野本にはこの「哥ものかたり」に「点」が付されていて、その写し手たちの不審もうかがえるところである。この集の本文にたちいることは、いま不可能なので、指摘にとどめるが、この「哥／ものかたり」は、果たして、所謂「歌物語」たりうるか、いささかの疑いを存しておく。おなじく、このようなばあいに引かれるもう一つの「うたものがたり」として、「栄華物語」あさみどり巻のそれがある。これも紙面の都合で、不本意ながら抄出に止める。

せちにのたまうことなればこ殿のうた物かたりをかきまうけて御てうとをしまうけてまちたてまつりしかと御かほをたにみたまはすなりにし

いま、便宜いわゆる「梅沢本」七によつた。この□り、松村氏以来諸注、卷三「さま／のよろこひ」に、道兼が栗田に山荘を経営したことにふれて、

……そこにかよはせ給て御障子

の繪には名ある所ををか、せたまひてさへ

き人／＼に哥よませ給世中のゑものかたり

はかきあつめさせ給……（同前一）

とあるところから、右の「うた物かたり」は、この「ゑものかたり」にあたるものとするが、これまた、はたして然るか。あわせ、同じく、いささかの疑念を呈しておかざるをえないが、論旨の混乱を忌んで、ここにふれる

にとどめる。いずれにもせよ、これらの「うたものかたり」は、今日の文学史の術語としての「歌物語」でありえないばかりか、ここにいう「歌語り」とも承応しないのではあるまいか。あえて疑念を呈しておく。

ここでは、便宜架蔵「潮廻舎文庫本 むらさき式部集」により、高橋由記氏の翻字されたものを用いた。該本は南波校本未収。ちなみにこの集の本文史研究の状況は、特定の本のそれを用いて信を置くに足るところは、ほとんど見えない、というのが、まずもって実状というべきではなからうか。日記のばあいと併せて、心ひそかに憂えている次第である。

(のむら せいいち・実践女子大学名誉教授)